

平成21年5月15日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18320041

研究課題名（和文） 出版機構の進化と原稿料についての総合的研究

研究課題名（英文） A Study of the Development of Japanese Publishing  
and its Effect on Royalties

研究代表者

市古 夏生（ICHIKO NATSUO）

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：90131515

研究成果の概要：著者の報酬と著作権等のデータを蒐集し、約4千3百項目となった。それをデータベース化した中からセレクトして近世から現代に至るまで1千2百項目ほど年表形式で公表した。論文としては、原稿料研究の意義、婦人記者の役割と賃金、岩野泡鳴・室生犀星・中野重治・三島由紀夫の報酬の問題などを研究成果の一端としてまとめている。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	5,100,000	1,530,000	6,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：著作権、著作権、原稿料、印税、出版機構

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、平成9～10年度にかけて科学研究費補助金（基盤研究（C））「幕末より明治に至る出版機構の総合的研究」を継承するものである。

(2) その研究報告書の中で、総論及び出版社の研究などの各論で見べき成果をあげたが、著作権、印税、原稿料等に関わる事蹟を年表形式でまとめた「明治期の著作権・印税・原稿料史稿」特に高い評価を受けた。

(3) 明治期だけでなく、近世から現代にいたる印税・原稿料及び著作権等の具体的な事例を蒐集して実態を把握し、その上で文筆家の報酬と著作権の問題に関する研究の充実を目指した。

## 2. 研究の目的

(1) 出版業者と文筆家との間に介在する関係を、時代の経済的・社会的・政治的背景に、歴史的・総合的研究をめざすものである。

(2) 近世から近現代にかけて出版文化が開花しめざましい成長を遂げるに従い、出版業者と文筆家の人間的・文学的關係は大きく変化してきた。近世では著者側からみれば、報酬の不明な近世初期、写本料という名目で支払われた近世の元禄期から近世中期まで、さらに潤筆料という対価が支払われる近世後期への移行となる。また業者側からみれば、幕初の版権のない時期、そして元禄年間に京都で重版及び類版の禁止を幕府承認のもとで本屋仲間が実施したことで、極めて強大な版権を本屋が獲得した時期への移行があった。これは天保の改革の時期を除いて幕末まで続いた。

(3) 近代では近世社会の慣習を受けて、原稿料制度はあったが、西欧の影響下に明治二十年前後には印税制度の萌芽をみる。新たに著作権の概念も導入され、業者の版権との関係をめぐってトラブルが頻発した。版権、著作権、そして報酬や原稿料、印税などの出版文化をめぐる社会的・経済的な環境が整備され、また新聞・雑誌などメディアの拡大化も関わり、初めて文筆家は自立し職業として成り立つことになる。

(4) 本研究では、近世から近現代に至るまで、以上の諸制度と報酬との関係を軸に関連する多大な資料を蒐集して、版権及び著作権の関わりに留意しつつ、近世から昭和の近現代までの報酬、原稿料、印税の変遷を捉え、原稿料及び印税と文筆家の関係を分析し、原稿料の様相と印税制度の定着、作家の経済的自立などの諸課題を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

(1) 写本・板本及び未刊の作家の書簡類の調査。国会図書館、東京都立中央図書館、国文学研究資料館、東京大学総合図書館、

京都大学附属図書館、天理大学附属天理図書館、大阪府立中之島図書館、日本近代文学館、石川近代文学館、丸岡町民図書館中野重治記念文庫、神宮文庫、吉川英治記念館、大阪府立国際児童文学館、室生犀星記念館、野村胡堂・あらえびす図書館などに出張し、近世の版権及び書物の製作に関する文献、近代以降の中野重治、室生犀星、吉川英治、野村胡堂などの原稿料・印税関連の調査を行った。

(2) 出版社の関係資料及び刊行されている文筆家の自伝・日記・書簡などの調査。曲亭馬琴、福沢諭吉、尾崎紅葉、巖谷小波、夏目漱石、岩野泡鳴、菊池寛、広津和郎、永井荷風、室生犀星、高村光太郎、中野重治、江戸川乱歩、山田風太郎、梶山季之、吉川英治等の日記・書簡類から原稿料・印税・版権のデータを採集した。また出版社側では近世京都の竹苞楼、近代の博文館、春陽堂、新潮社、講談社、文藝春秋社などの社史類を参考にした。

(3) 先人の研究文献の調査。原稿料・印税の研究では松浦総三『原稿料の研究』(昭和53年、みき書房)、資料の裏打ちのもとに作家への報酬を考究した研究書である福田清人「経済面から見た近代作家研究」を収める『近代の日本文学史』(昭34、春歩堂)、そして伊藤整の『日本近代文壇史』は明治前後から昭和までの文壇史であるが、作家の活動の背景にある経済的側面にしばしば言及しており、大いに参考になった。さらに近世では曲亭馬琴の潤筆料に関して、佐藤悟「馬琴の潤筆料と板元」(『近世文芸』59号、平成6年1月)を主な参考文献とした。

### 4. 研究成果

(1) 本研究のキーワードを原稿料(潤筆

料)、印税、著作権、著作権、出版機構に設定した。原稿料・印税を中心にして、その背景にある著作権、著作権、出版機構関係の資料も収集して、一覧できるような基礎資料を作成し、その上で作家への報酬、書物製作の問題などの分析を行うこととした。

(2) 資料から採集された膨大なデータを入力し、それを編年体でまとめた。そのデータは4, 350項目程度になり、研究の基礎資料として十分に有用なものだと判断された。近世約400項目、明治時代で約1, 200項目、大正～昭和20年まで約1, 400項目、昭和20年～平成12年まで約1, 350項目となった。

(3)①近世では報酬に関わる資料は少なく、著者への献本、物品による謝礼なども報酬の一部と考えた。その他著作権や書物の発行部数などは、本屋側の営業の問題ではあるが、それが著者への報酬に関わる関係で資料に含めた。

②明治では20年までやや資料が手薄であるが、雑誌の発行が活発になる20年代以降は挿絵の画料に至るまで採集した。

③大正から昭和20年までは出版界が興隆した時期でもあって、比較的豊富にデータが集められたが、太平洋戦争末期は時代環境を窺わせ、報酬の資料はやや少ない。

④昭和21年から平成は、戦後から昭和30年まで用紙の問題などがありながらも、活発な出版活動を反映し、また著者の報酬に関する感覚の変化もあったためか、データは豊富である。ところが昭和330年代以降は、資料の探し方に起因するのか、データ量が少なくなり、平成になってからは現実に活動している著者がほとんどなので、私的な日記類等を公表していないことが大きく影響して、データは過少である。報告書には四分の一ほど掲載し、成果の一

端とした。

(4) 基礎資料を基にして研究分担者、連携研究者、協力者がキーワードに関わる論文を各種観点から執筆し、報告書にまとめあげた。

①市古夏生は『岩野泡鳴日記』を資料として、翻訳料を印税で受け取る契約をしながら、実際には渡した枚数分の原稿料を前渡し金と称して受け取っていた実態を究明した。

②菅聡子は、欧米の視点も踏まえた原稿料を文学研究者が研究の対象とする意味について論じている。

③佐藤至子は曲亭馬琴の書簡など寛政年刊から天保年間までの資料から、読本・草双紙の経費、版木の扱われ方、出版部数、価格の設定、原稿料の支払い等に関してまとめた。

④藤本恵は昭和初期に最下級の原稿料で文筆活動を行った女性の出版関係者(主に編集者であるが、当時は夫人記者と呼称)の実態、活動を論じた。

⑤谷口幸代は「室生犀星日記」や小説などを資料として、その創作の中に、原稿料、書き手、作品、出版機構、読者が織りなす複雑な様相を作中で追求する姿勢を持った作家と論じている。

⑥竹内栄美子の中野重治の小説・随筆類を資料として、昭和10年代から敗戦までの中野の受け取っている原稿料を前提とし、中野にとって「文章を売ること」がどのような意味を持つかを論じている。

⑦研究協力者の武内佳代は三島由紀夫の昭和21年「会計日記」の原稿料を紹介し、諸説はあるが僅か9ヶ月で大蔵官僚を辞し、作家に転身する決断ができたのは、日記に登場する原稿料の存在と論じている。

(5) 今後は編年体にした基礎データの拡充

と精選をもくろみ、1, 2年のうちに書物として公刊する予定である。また雑誌『江戸文学』で市古が企画した「著作権と著者の報酬」というテーマで特集を組み、平成22年5月に刊行を予定している。市古のほか、佐藤、菅、谷口の論考が掲載される。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 市古夏生、大正期における岩野泡鳴の原稿料、『出版機構の進化と原稿料についての総合的研究』、41-45、2009、無
- ② 市古夏生・菅聡子・竹内栄美子・谷口幸代・佐藤至子・藤本恵、原稿料史年表稿—17世紀～20世紀—、『出版機構の進化と原稿料についての総合的研究』、46-132、無
- ③ 菅聡子、原稿料とは何か—その問いの意味するところ—、『出版機構の進化と原稿料についての総合的研究』、6-11、2009、無
- ④ 竹内栄美子、「文章を売ること」—昭和十年代、中野重治の原稿料—、『出版機構の進化と原稿料についての総合的研究』、31-37、2009、無
- ⑤ 谷口幸代、犀星日記における原稿料—出版文化の基礎的研究・その一—、『名古屋市立大学大学院人間文化研究』、340-354、2008、無
- ⑥ 谷口幸代、室生犀星が描いた原稿料—出版文化の基礎的研究・その二—、『出版機構の進化と原稿料についての総合的研究』、24-30、2009、無
- ⑦ 佐藤至子、『白縫譚』の価格、新日本古典文学大系 明治編『明治実録集』月報、2007、1-4、無

⑧ 佐藤至子、江戸後期における出版事情、『出版機構の進化と原稿料についての総合的研究』、12-18、2009、無

⑨ 藤本恵、〈婦人記者〉の仕事と賃金、『出版機構の進化と原稿料についての総合的研究』、19-23、無

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

市古 夏生(ICHIKO NATSUO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：90131515

### (2) 研究分担者

菅 聡子(KAN SATOKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：70224871

谷口 幸代(TANIGUCHI SACHIYO)

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号：50326162

### (3) 連携研究者

竹内 栄美子(TAKEUCHI EMIKO)

千葉工業大学・工学部・教授

研究者番号：00236415

佐藤 至子(SATO YUKIKO)

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：70329639

藤本 恵(FUJIMOTO MEGUMI)

都留文科大学・文学部・准教授

研究者番号：00381707